

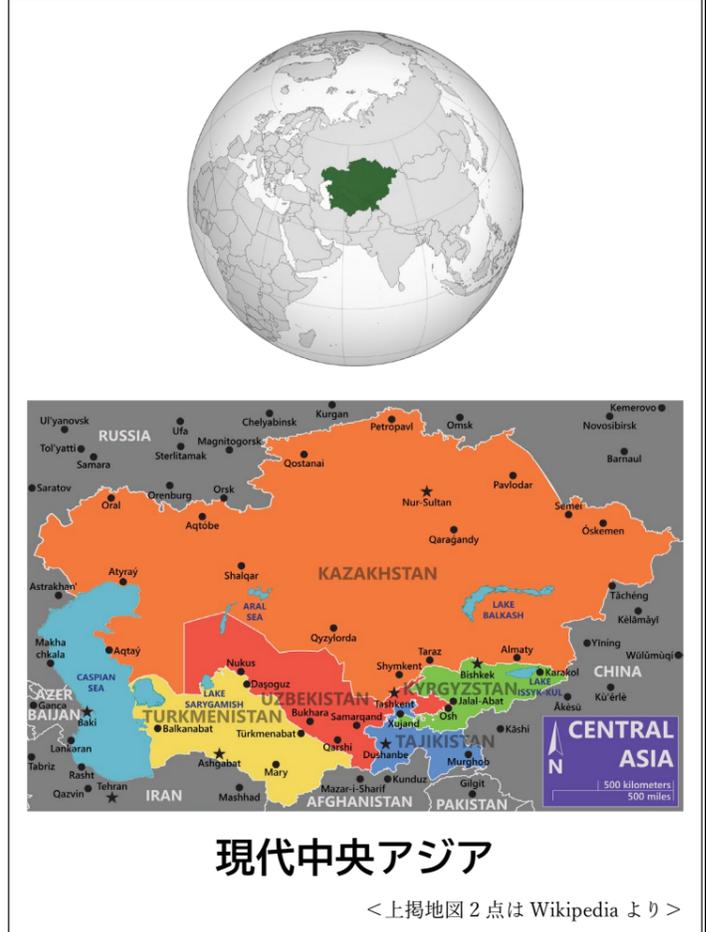
# 国際社会学部—旧ソ連中央アジア地域

## 文明の十字路、ユーラシア大陸の中核

中央アジアという地域にはいくつかの定義のしかたがあります。ここでは便宜的に、これをウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタンという、旧ソ連邦を構成していた5つの国からなる地域としてとらえることにしましょう。これらの国々の独立が1991年という比較的最近の出来事だったことからすれば、この地域は現代中央アジアと呼ぶこともできます。

本学では、国際社会学部の「中央アジア地域（ロシア語及びウズベク語）」（定員6名）と言語文化学部の「ロシア語及びウズベク語（中央アジア地域）」（定員5名）の両方の入学者（計11名）が1つのユニットとして一緒に学びます。このユニットは「中央アジア専攻」と通称されます。中央アジア専攻は、ロシア語とウズベク語という2つの専攻語を学ぶ点に大きな特徴があります。この2言語を活用し、さらに他言語習得にも応用することで、この地域の政治、経済、社会、民族、文化、宗教、そしてその歴史と現在を幅広く、奥深く、効果的に学ぶことができます。

古くはイラン系の諸民族の存在感が比較的強かった中央アジアの領域は、やがてテュルク化とイスラーム化を経験し、13世紀にモンゴル帝国の支配、近代以降はロシア帝国、ソ連邦の支配を経たことで、諸文明の折り重なるきわめて動的な空間となってきました。ここにはテュルク語文化圏、ペルシア語文化圏、ロシア語文化圏が複合・重層し、それが人々の生活文化や思考様式の多様性にも色濃く反映しています。ポスト冷戦期のグローバル化のなか、この地域は国際関係において地政学的重要性を高めてもいます。こうした現代中央アジアにおけるナショナリズム、外交、市場経済化、資源エネルギー問題、生態環境保全、伝統・宗教復興などの諸事象を学ぶことで、バランス感覚のある開けた視座と世界観を養うことができるでしょう。



ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、トルクメニスタンの各国ではテュルク系のウズベク人、カザフ人、クルグズ人、トルクメン人がそれぞれ基幹民族であり、ウズベク語、カザフ語、クルグズ語、トルクメン語が国家語です。一方、タジキスタンではイラン系のタジク人が基幹民族であり、タジク語が国家語です。タジク語は「中央アジアのペルシア語」にほかならず、ソ連期以前にはじっさいにペルシア語（ファールス語）の名で呼ばれていました。

ウズベク語 c テュルク諸語の南東グループ（カルルク語群）  
 カザフ語 c テュルク諸語の北西グループ（キプチャク語群）  
 クルグズ語 c テュルク諸語の北西グループ（キプチャク語群）  
 トルクメン語 c テュルク諸語の南西グループ（オグズ語群）

⇕

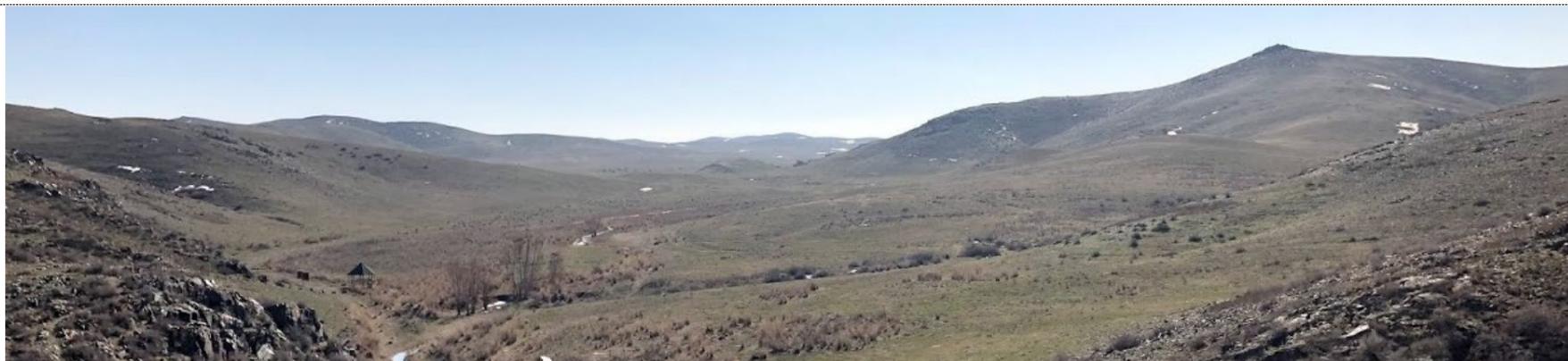
タジク語 c インド・ヨーロッパ諸語イラン語派の西イラン語グループ

### 現代中央アジア各国の国旗、国章、元首

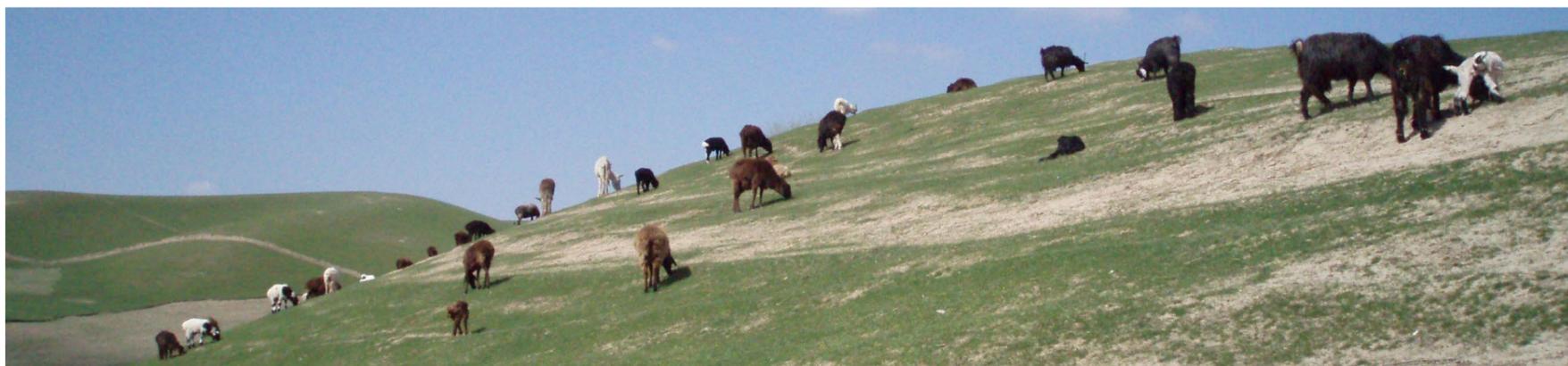
ウズベキスタン共和国	カザフスタン共和国	クルグズ共和国	タジキスタン共和国	トルクメニスタン
ミルジヨエフ大統領 (任 2016.12.14~)	トカエフ大統領 (任 2019.3.20~)	ジャパロフ大統領 (任 2021.1.28~)	ラフモン大統領 (任 1994.11.16~)	ベルディムハメドフ大統領 (任 2022.3.19~)

## 中央アジアの自然と地理

自然地理の観点からみれば、現代中央アジアは、その北はウラル山脈とイルティシュ川、東は天山山脈とパミール高原、南はヒンドークシュ山脈とコペト山脈、西はカスピ海とウラル川によっておおむね境を区切られる地理的空間といえます。北部には大草原地帯が広がり、北方では針葉樹林地帯へと連なっています。一方、南部に散在するオアシス地帯の多くは、万年雪を頂く天山山脈とパミール高原にそれぞれ水源を発するシル川とアム川という大河川によって潤されます。両者が流れ込むアラル海はかつて世界第4位の湖面積を誇りましたが、現在では水域は大幅に縮小し、これは環境問題にも直結しています。アム川の中下流域の南北にはカラクム（黒砂）砂漠とクズルクム（赤砂）砂漠という広大な砂漠が展開しており、ここにはこの地域の大陸性乾燥気候の特徴がよく表れています。



タムガリ・タスの草原と丘陵（カザフスタン）＜写真提供：鍛冶屋沙月氏＞



カシュカダルヤ州におけるなだらかな丘状の草原での放牧（ウズベキスタン）＜写真提供：宗野ふもと氏＞



フジャンド市を流れるシル川（タジキスタン）＜写真提供：小沼孝博氏＞



イスタラウシャン市から見晴らすトルキスタン山脈（タジキスタン）＜写真提供：小沼孝博氏＞



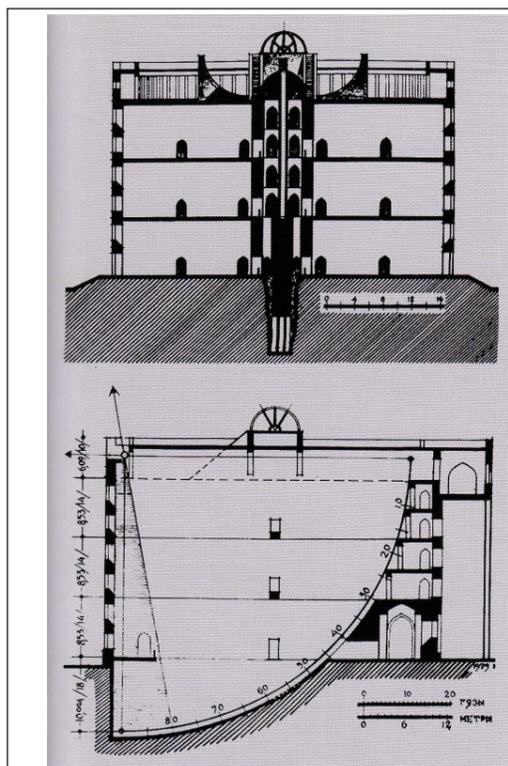
カスピ海（トルクメニスタン）＜写真提供：Ayshirin Aliyeva氏＞

## 人と文化—知的営為と学的所産

イスラーム文明、ペルシア語古典文学、テュルク語古典文学の発展に貢献した中央アジア出身の学者、文人、思想家たち

- 高度な代数学の著作により数学用語「ロガリズム」「アルゴリズム」にその名を刻んだホラズミー（800頃-47頃）
- クルアーンに次ぐ権威を認められるスンナ派最高権威のハディース集『真正集』の編纂者たるブハーリー（810-70）
- 「ペルシア詩人の父」と称えられる、ペルシア語韻文学草創期の代表的詩人ルーダキー（860/70頃-941）
- アリストテレスの形而上学の注釈で名高い哲学者ファーラービー（870頃-950頃）
- スンナ派2大神学派の1つマートウリーディー学派の名祖マートウリーディー（873以前-944頃）
- インド学の名著『インド誌』や天文学書『マスウード宝典』などで知られる百科全書的学者ビールーニー（973-1050頃）
- 著書『医学典範』のラテン語訳書が中世ヨーロッパの大学でも講じられた哲学者・医学者イブン・スィナー（980-1037）
- 詩集『叢智集』で知られ、テュルク系遊牧民のイスラーム改宗を促したスーフィー詩人アフマド・ヤサヴィー（1166/67没）
- 広範に写本の流布したハナフィー法学派最高権威の法学書『ヒダーヤ』の編纂者たるマルギーナーニー（1197没）
- メヴレヴィー教団の開祖にして、ペルシア語神秘主義詩の名作『精神的マスナヴィー』を残した詩人ルーミー（1207-73）
- 世界各地にその道統が伝播・拡大したナクシュバンディー教団の名祖バハーウッディーン・ナクシュバンド（1318-89）
- 天文観測をみずから指揮し、世界最高精度の天文表を残したティムール朝の学者君主ウルグベク（1394-1449）
- チャガタイ語の回想録『バーブル・ナーマ』で知られ、インドにムガル朝を建てた文人君主バーブル（1483-1530）

最先端の学知----ウルグベクの天文表（1648年オックスフォードでラテン語訳刊行）は近世ヨーロッパ天文学にも影響



ウルグベクの天文台復元図



ウルグベクの天文台跡（大理石製六分儀遺構）



ウルグベクの銅像（サマルカンド市天文台跡）

ブハラとサマルカンドのマドラサ----スンナ派イスラーム教学における学的伝統継承の舞台

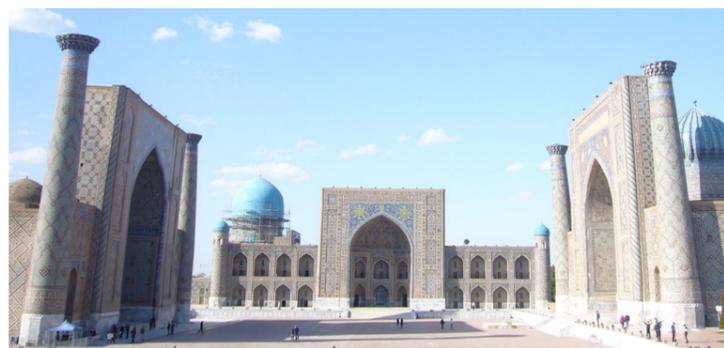
- 文献上でのマドラサの初出は10世紀ブハラの「ファールジャク・マドラサ」
- ティムール朝の広域支配下で観察されるマドラサ建築の巨大化と学課程の多彩化
- ブハラのマドラサの双壁、ミーリ・アラブ・マドラサとコカルダシュ・マドラサ
- ミーリ・アラブ・マドラサは中央アジア・スンナ派イスラーム教学の総本山  
ソ連初期に閉鎖後、1945年以来現在に至るまで宗務者養成機関として機能



ミーリ・アラブ・マドラサ（1536/37）



コカルダシュ・マドラサ（1568/69）



サマルカンドのレジスタン広場におけるマドラサ鼎立

- 左 = ウルグベク・マドラサ（1420）
- 右 = シールダール・マドラサ（1635/36）
- 中央 = ティッラーカーリー・マドラサ（1660）

## 王都から世界遺産へーウズベキスタンの歴史都市

### ヒヴァ---芸術性際立つ博物館都市（1990年ユネスコ世界文化遺産登録）



イスラーム・ホージャの塔



ムハンマド・アミン・ハンの塔



パフラヴァーン・マフムード廟  
金曜モスク（内観）

アム川下流域に広がるホラズム地方の都市ヒヴァは、17世紀以降ヒヴァ・ハン国の首都となりました。とくにコングラト朝（1804-1920）の時代に、ヒヴァのイチャン・カラ（内城）では君主や高官によって旺盛な建設事業が推進され、美しい建造物群が現れました。内城の金曜モスクの裏手には、パフラヴァーン・マフムード（13～14世紀の力士にしてスーフィー詩人）の墓廟が位置しています。この墓廟建築複合体はコングラト朝期にめざましい発展をとげました。それはパフラヴァーン・マフムードがコングラト朝とその都ヒヴァの守護聖者として尊崇されていたからにほかなりません。同朝期の建築物としては、幾何学模様で彩られ、青天を貫かんとするかのごとく聳え立つ壮麗なミナレット（尖塔）も目を引きまします。ヒヴァは、芸術性にあふれる博物館都市なのです。

ザラフシャン川の下流に位置するブハラには、サーマーン朝（873-999）、シャイバーン朝（1500-99）、アシュタルハーン朝（1599-1747）、マンギト朝（1756-1920）、ブハラ人民ソヴィエト共和国（1920-24）の時代に首都がおかれまました。ブハラはスンナ派イスラーム教学の中心地として、市内各所のマドラサに中央アジア域内外から多数の留学生を集めました。マンギト朝期以降、ブハラは「聖なるブハラ」の美称で知られるようになります。郊外に眠るスーフィー聖者、バハーウッディーン・ナクシュバンドが王権とその首都ブハラの守護聖者として崇敬されたのは、ヒヴァのパフラヴァーン・マフムードのケースと同様です。

### ブハラ---聖なる宗教都市（1993年ユネスコ世界文化遺産登録）



大モスクの正門玄関と大塔



バハーウッディーン・ナクシュバンド廟



アルク（宮城）



サーマーン朝王族廟

### シャフリサブズ---ティムールの緑の都（2000年ユネスコ世界文化遺産登録）



峠から見下ろすシャフリサブズ



アクサライ（白い宮殿）の城門跡



ティムール像



アクサライの城門跡（片方内側）

シャフリサブズ（古名キシユ）は、ティムール朝（1370-1507）の創始者アミール・ティムール（1336-1405）の故郷として知られます。シャフリサブズとはペルシア語で「緑の都」を意味し、ティムールの統治期にこの名で呼ばれるはじまりました。サマルカンドの南方、峠越しに位置するこのまちは、カシュカ川に潤されるじつに緑豊かなオアシスであり、ティムールのもとで首都機能の一端を担い、大規模な商業施設や宗教施設のほか、巨大なアクサライ（白い宮殿）が建造されました。この宮殿の本体は現存しませんが、アンカラの戦い（1402）を契機とする技術者の移動・交流という条件下で、当時のオスマン朝の首都エディルネに造営された宮殿のモデルになったとも指摘されます。ウズベキスタン独立後の観光資源開発が顕著な一方、2016年以降の「危機遺産」指定が懸念されます。

ザラフシャン川中流域のオアシス都市サマルカンドは、日本では「青の都」として有名です。チンギス・カンによる破壊後、ティムールが再建・定都し、めざましく発展しました。ティムールは市内中心部のビービー・ハヌム・モスクのほか、近郊にいくつものバグ（庭園）を造営し、都市開発に尽力しました。これは彼がここに地上の楽園の現出を期したためといわれます。じっさいティムール朝の史家が用いた「楽園のごときサマルカンド」という美称はやがて人口に膾炙し、鮮青色に彩られる都市景観美の強調に常用されてきました。サマルカンドはソ連初期にもウズベク共和国（1924-91）の首都（～1930）になりました。

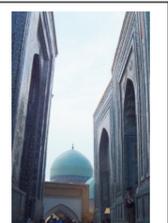
### サマルカンド---楽園のごとき庭園都市（2001年ユネスコ世界文化遺産登録）



前大統領カリモフ廟付近から見晴らすビービー・ハヌム・モスク



グーリ・アミール廟



シャーヒ・ズインダ墓廟群



## 諸文明の交流と融合

中央アジアは古くから現在に至るまで、遊牧文明、オアシス文明、イスラーム文明、ロシア文明、ソ連文明、現代グローバル文明といった諸文明が交流し複合する舞台となってきました。それぞれの国では各文明のさまざまな所産と要素が慣習や景観のなかに保存され、人々の日常生活の随所に今なお息づいています。それらは物理的・物質的な面あるいは精神的・思想的な面において、すでに何らかの独特の融合や調和をとげた姿でも観察されます。



アル=ファーラービー記念カザフ国立大学 <写真提供：鍛冶屋沙月氏>



トルクメニスタンの首都アシュガバート <写真提供：Ayshirin Aliyeva 氏>



ヴォズネセンスキー主教座教会（アルマトウ） <写真提供：鍛冶屋沙月氏>



祭礼時に共食される中央アジアの伝統料理アシュ、またの名をパラウ（ピラフ）（ウズベキスタン）



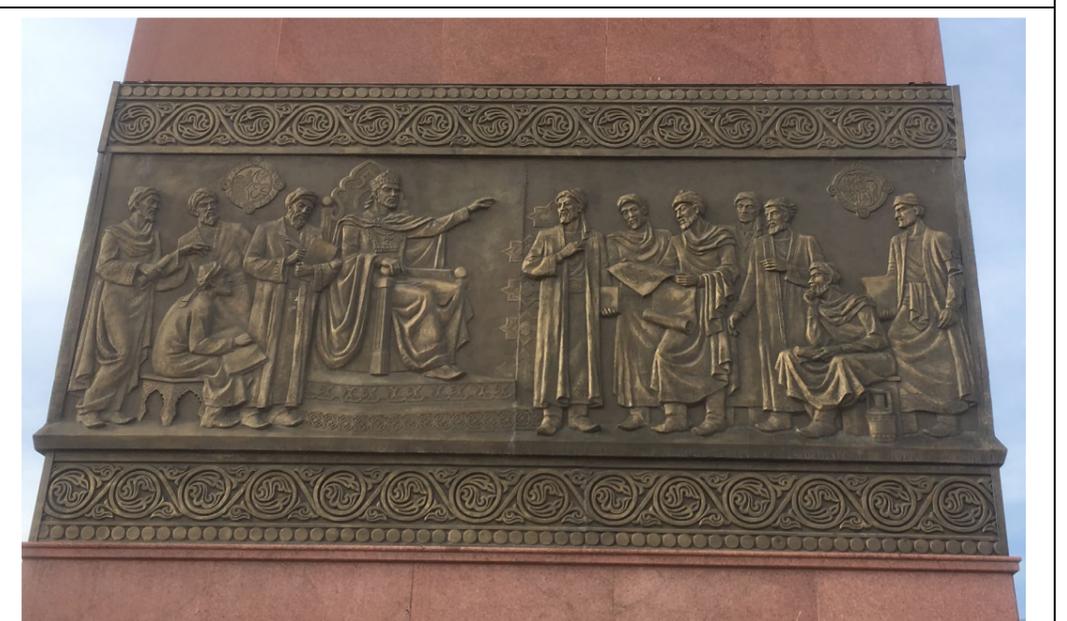
山岳湖畔の天幕（カザフスタン） <写真提供：鍛冶屋沙月氏>



屠った子山羊の胴体を騎手たちが奪い合う伝統競技ウラク（ウズベキスタン） <写真提供：宗野ふもと氏>



「ゾロアスターがグシュターズ王の許に火をもたらす」（『王書』挿絵）  
ソグド州立歴史博物館の展示画（タジキスタン） <写真提供：小沼孝博氏>



サーマーン朝君主イスマーイールと側近学者たちの浮き彫り（タジキスタン） <写真提供：小沼孝博氏>

## 現代社会の諸問題

### 環境問題



東西冷戦期のセミパラチンスクにおける核実験と放射能汚染  
(BBC UZBEK 動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=Ev2J256nIAQ&t=326s>) より)



口絵 7 廃船の残るかつてのアラル海湖底。ソ連期に漁業基地として栄えたムイナク（カラカルパクスタン）にて、2005年、帯谷知可撮影。  
(帯谷知可ほか編『中央アジア』（朝倉書店、2012年）より)

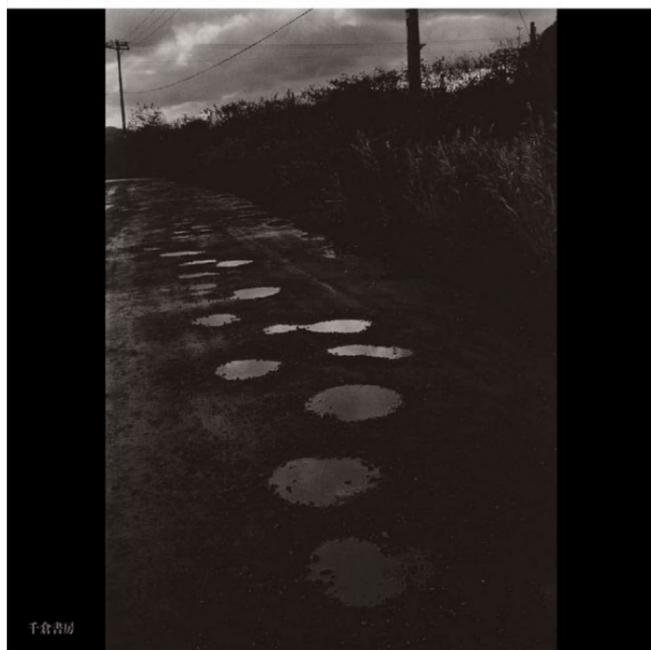
### 権威主義体制

The Dictator's Dilemma at the Ballot Box:  
Electoral Manipulation, Economic Maneuvering, and Political Order in Autocracies  
東島雅昌 HIGASHIJIMA Masaki

著者  
21世紀  
の国際  
環境  
日本  
008

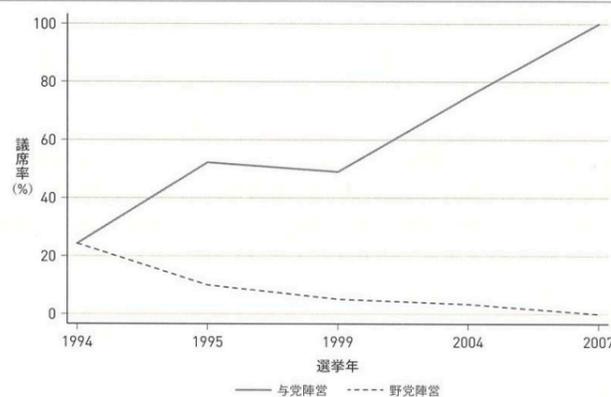
## 民主主義を装う権威主義

世界化する選挙独裁とその論理



千倉書房

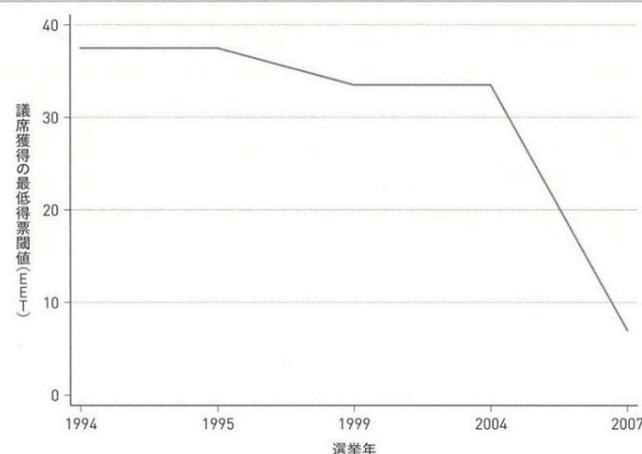
図 8.1 カザフスタンにおける政権与党の支配強化(1994～2007年)



出典：Olcott (2002); *Inter-Parliamentary Union* (<http://www.ipu.org/parline-e/parlinesearch.asp>)

(東島雅昌『民主主義を装う権威主義』（千倉書房、2023年）232頁より)

図 8.2 カザフスタン議会選挙における議席獲得の最低得票閾値(EET)(1994～2007)



(東島雅昌『民主主義を装う権威主義』（千倉書房、2023年）243頁より)

### イスラーム復興



口絵 26 ブハラ（ウズベキスタン）のカラーン・モスクにおける金曜日の集団礼拝。1990年代初め、N. ウタルベコフ撮影。

(帯谷知可ほか編『中央アジア』（朝倉書店、2012年）より)



口絵 27 サマルカンド（ウズベキスタン）のシャーヒ・ズィンダ廟に参詣する女性たち。2009年、N. ウタルベコフ撮影。

(帯谷知可ほか編『中央アジア』（朝倉書店、2012年）より)